饒平名智太郎—沖縄とインドとの間—

中 村　平 治

世界社創立の頃

饒平名智太郎（ヨヘナ・チタロー、一八九一〔明治二四年〕～一九六〇〔昭和三五年〕）は沖縄出身です。のちに永丘（ナガオカ）家を興した上で、同家を相続します。ここでは彼の文筆活動の開始時を念頭において饒平名で通します。一九〇八年に沖縄県立沖縄中学校を卒業、翌年東京高等商業学校（現一橋大学）に進学しますが、家の都合で中退、続く沖縄近隣の東亜同文書院（上海）への遊学も病気で断念しました。こうして彼は「独学で素養」を究める道を選びます。

第一次世界大戦期の一九一六年、饒平名は中華民国の北京でジャーナリズムの世界に入り、一九年には東京で新創立の改造社に入社し、雑誌「改造」の編集長に就任、インドとソ連を自己の関心対象に絞り、活動を始めます。＊ 他方で、彼は第一次の日本共産党（一九二一年~二四年）の中央委員を山川均や鈴木茂三郎らと勤めました(1)。その後、二六年には世界社を設立し、出版人としての面目を発揮しました。＊＊ また三一年、ソ連訪問を含め、以後、アジア各地の視察を試み、三七年には拓務省に関係し、四一年から終戦まで東洋拓殖株式会社を職場にしました。

一九七〇年代に私は饒平名の存在を、そのインドに関する書名と共に、比嘉春潮『沖縄の歳月』（中公新書、一九六九年）で知っていました。近時、日沖関係の推移が重くのしかかり、私は彼の諸著作の中で二冊の書物—共に一九二二年刊—である『ガンディー〔ガンジ〕と真理の把持』（鹿子木員信と共著、改造社）と、『ガンディー〔ガンジ〕審判の日』（翻訳、改造社）とを読む機会を作りました。ここでは、二冊のなかで前者の現代インド論の諸特徴を指摘し、末尾で彼の総括的な著作となる沖縄論に及ぶことにします。二〇一〇年夏、沖縄タイムス社に勤務されてきた由井晶子さん(2) のご好意を介して、饒平名のご遺族、特に故智太郎の姪にあたる嘉数智子さんにお会いでき、故人に関する思い出、略歴や肖像写真などの貴重なデータを頂戴しました。お二人への感謝の念を込めて、この事を記します。尚、この文章上の責任はすべて執筆者の私に有ることをお断りしておきます。本稿では饒平名の文章を中心にして、明らかに

＊ この頃、北京・東北地方やソ連のシベリアを訪れ、また孫文、カラハンや片山潜らの知遇を得ました。
＊＊ その刊行物には朝日新聞社通信部編『県政物語』や、伊波普猷『沖縄よ何処へ』が含まれています。

不適切だと判断される表記類を括弧〔　〕内に記し、すべてに訂正を施しています。

（Ｉ）饒平名は訳著『ガンディー審判の日』に寄せた解説で、以下のような帝国主義批判の観点を示しています。

―私は資本主義を憎むと同じ程度に、かの傲慢な帝国主義をも憎む。そして日本において前者に対する闘争が当面の課題であると同じく、後者に対する戦いは朝鮮やインド〔印度〕においての当面の問題だと私は考える（以下原著、2 頁）。

―私はインドにおいて、帝国主義に対する闘いが資本主義に対する闘いよりも当面の問題だと云った。しかし近代的生産関係に基く労使間の争いが、全然ないというのではない。この国にも既にそれはある。インドの資本家と云えば、英国人の茶および藍栽培地所有者と貿易業者か、もしくは英国に忠誠なる封建諸王、地主、または一部の商工階級の人が主であって、しかも彼らは英国の支持者ときている。だから帝国主義に対する解放運動、すなわち資本主義に対する解放運動だ、という特異な状態に置かれてある。換言すれば、英国の支配を脱することは、ひとしく資本主義のくびきから免れることなのだ。少なくともインドの民衆はそう信じている。そして革命運動と労働運動の指導者は共通で、プロレタリアの間においても、最も人気ある指導者はガンディー…であった（4 頁）。

ここでは帝国主義論をめぐって、饒平名と同時代に論壇に登場し、饒平名と対照的な議論を提起した大川周明（一八八六～一九五七）に言及すべきです。大川は饒平名の著作に遅れて一九三一年に刊行の書物[3] で、「朝鮮統治と印度統治」なる一節を設け、日本の朝鮮統治と英国のインド統治を比べています。なお饒平名の存在は大川の視野外にありました。

大川によれば、日本の朝鮮合併と、英国のインド領有とはその動機において本質的な相違があります。インド征服後、百年をへて、英国は貿易を支持するために、戦争の必要を感じた。英国が土地の獲得を念とするに至ったのは更に半世紀以後のことに属し、藩王諸国〔土民諸国〕に対して優越政策をとったのは一九世紀以後のことである。かくて英国は営利目的で来印して、その目的のためにこれを征服するに至った。日本の朝鮮合併は、独立の能力なかりし朝鮮が、万一他国の領有に帰する場合、日本は長槍を胴中に擬せられると同様の脅威を感ずるが故に、直接には国防上の止み難き必要から、そして惹いては東亜全局の平和を確保する必要から行なわれた。

次にインドおよび朝鮮は、それぞれ英国および日本に対して、外面的、内面的に根本的に異なれる関係に立つ。まず外面的に見ても、朝鮮と日本とは一衣帯水の隣接地帯でありますが、インドは英国から非常に遠隔の地にあります。従って朝鮮と日本が一つになることは極めて自然であり、一つになることが東洋平和を確保する上に必要であります。一方英国のインド領有は不自然であり、その保持のために無理を遂行し、他国との利害衝突を招き、世界平和を脅か

しています。内面的に見ると、日本と朝鮮は儒教・仏教を根拠とする東洋文明の場である上に、人種的にも同種という間柄であり、彼我の往来は建国以前よりのことであった。しかし英国とインドとは文化的に何らに共通なく交渉も無い。ギリシャ思想とローマ法とキリスト教とを根底とするヨーロッパ文明と、ヴェーダ思想に根拠を有するインド文明は、南極と北極との関係同様に遠く隔たっております。

第三に日英両国は、その領有の当初から、朝鮮及びインドに対してまったく認識または理解の程度を異にしております。日朝間の交通は国初以来である上に、本来同文同種の間柄ですから、併合当初から、日本は朝鮮および朝鮮人について、十分ではないにしても、相当に精確なる認識を有していた。しかし英国は当初よりインドの認識を誤り、インドとインド人を法外に劣等視しました。英国人のインド人に対するこの態度が今日のインドにおける排英運動を招いている根本原因であります。

大川の議論に見られるイギリスのインド統治批判は一見説得性を持っているかに見えます。しかし彼の議論には二つの前提的な疑問があり、イギリス帝国主義の内在的な批判者としてのダーダーバーイー・ナオロージー（一八二五〜一九一七）の諸活動の無視と、第一次世界大戦後のインド国民会議派による、日本帝国主義批判の政治・行動の展開を欠落させています。しかも彼による日本の朝鮮支配肯定論は、それぞれの論点において何らの歴史的な根拠を持っておらず、反論にも値しない議論の堆積に過ぎません。一方で韓国併合（一九一〇年）を承認する、この暴論が、特に一九三一年以降の中国を主敵とする日本のアジア侵略戦争の楯となり、大川も決して無縁では無い“アジアの盟主日本”が、戦争末期に大東亜共栄圏の結成にまで転落していった事態は銘記されるべきです。

饒平名自身の指摘に関連して、特に注意すべきはまず帝国主義と資本主義への敵対関係が議論の土台に据えられており、日本の場合の反資本主義と朝鮮やインドの場合の反帝国主義のそれぞれの闘争が区別されている点にある。これは饒平名による独立した資本主義国家日本と、植民地である朝鮮やインドとを区別する、置かれた状況への客観的な認識の深さを反映しています。当然、インドの民衆に課せられた変革の問題は、この二つの課題の克服と達成に関連するものです。この解説では反帝国主義の旗を掲げるマハートマー・ガンディー（一八六九〜一九四八）の政治指導を論じて、圧倒的な多数のインド民衆が背後にある現実を明確に指摘しています。つまり植民地インドにおける政治的な転換の歴史的な意義を最も尖鋭な形で受け止めていたわけです。同時代インドのこうした政治変動をリアル・タイムで把握していた、この饒平名の即応的な立場に改めて驚き入ります。

こうして饒平名は二〇世紀初頭に発表された、幸徳秋水『帝国主義』(4) のすぐれた継承者の一人であったと云えます。ちなみに『ガンジーと真理の把持』の中で、饒平名は植民地インド

の独立運動の一方の指導者で、苛烈なイギリス帝国主義批判を提起したダーダーバーイー・ナオロージーに言及しています。興味深いことに、このダーダーバーイーによるイギリス帝国主義告発の書 *Poverty and Un-British Rule in India*, Swan Sonnenschein, London 〔インドにおける貧困と非イギリス的支配〕は、一九〇一年に刊行されており、二〇世紀初頭という時点に関する限り、幸徳の書物の発表年と奇しくも一致しています。

（Ⅱ）次に『ガンディーと真理の把持』から、饒平名が直接対象とする、ガンディーの抵抗思想と政党論と並んで、その経済観を取り上げます。

（1）**抵抗思想としてのサッティヤーグラハ**：―ガンディーの思想はサッティヤーグラハ（Satyagraha）〔サチヤグラハ〕において最もよく表明されている。ガンディーの思想はバガヴァッド・ギーター〔バガヴァド・ギタ〕の哲学にその淵源を発している。彼の正を踏んで一歩も譲らざる先天性はインド教とギーターによって洗練され、そして南アフリカという背景で完成された。〔以下、この節は饒平名によるガンディーからの引用であり、ガンディー自身による原典の文章の内容照合は残された課題ですー引用者〕。

―サッティヤーグラハの名は、余が南アにおいて、その地における印度人が満八年の間、揮える力を言い表さんがために鋳造した言葉である。それは当時英国及び南アにおいて、受動的抵抗の名のもとに行われつつあった運動より区別せんがために鋳造した（69 頁）。

―その根本義は「真理の掌握〔把持〕」、したがって真理の力を意味する（69 頁）

―サッティヤーグラハは、受動的抵抗とその類を異にすること北極・南極の如きものがある。後者（受動的抵抗者）は弱者の武器として考案せられ、その目的を達するがためには、物力すなわち暴力の使用を排斥せざるものである。しかるに前者は、最強者の武器として考案せられ、あらゆる型もしくは形においても、暴力の使用を排斥する（70 頁）。

―サッティヤーグラハは自為自立である。それは用いられるに先立ち、敵の承認を必要とするのではない。それは実に、敵の抵抗にあう時に最も強く輝くものである。それ故に、それは不可抗的である。サッティヤーグラヒー（Satyagrahi）〔サチアグラヒ〕は敗北の何たるを知らぬ、それは彼が真理の愛のために戦って、疲労するところ無きものであるからである。戦いにおける死は救いであり、牢獄は自由への門出である（73－74 頁）。

―犯罪とは普通の法の破壊者が法に触れるようなことをして、その刑罰を避けようとしている場合をいうのであって、市民の抵抗者においては、そうではない。…ある種の法律が不正であって、それに服従することが不名誉であると信じる時機が来た時は、その時こそは、公然と市民的にその法を破って、それに対する刑罰をおだやかに受けるのである。そして立法者の行為に対する彼の抗議を銘記するためには、彼は公開的に、道徳上の破廉恥とならない、他の法にも不服することにより、国家に対する協力〔協同〕を撤回すべきである。…サッティ

ヤーグラハの美と効果とは偉大で、その教義は子供にも説教することのできるほど簡単である（77－78 頁）。

饒平名が指摘しているように、第一次大戦直後の一九一九年に、インドではマハートマー・ガンディー指導の非暴力的抵抗運動が提起されます。運動の開始は一九一九年四月六日です（163 頁）。もともとサッティヤーグラハなる表現は、ガンディーによるヒンディー語のサッティヤー（satya 真理）とアーグラハ（agraha 掌握）の合成語で、サッティヤーグラハと記述しています。アーグラハはもともと強い意義を持つ用語であり、把持という「受け身で現状維持的」な理解の次元に止まりません[5]。しかも饒平名はサッティヤーグラハの実践者のサッティヤーグラヒー（satyagrahi）なる用語を所論の中で使用しています。彼は名詞あるいは形容詞に英語のアルファベットのアイ（ｉ、つまりイ）をイーと長母音化して、単数・複数の人間とその形容詞形を示す、ヒンディー語を含めたインド・アーリヤ系語群―英・独・仏などの諸語と遠戚関係になる―に特有な構造を捉えていたことになります。

このサッティヤーグラハは、ガンディー自身によって、その語義に即して英語表現の Non-violent Resistance、つまり非暴力的抵抗なる表現が広く使用されました。しかし、この用語とその思想は、インドに加えて日本を含めた外部世界で確定的に受容されたわけではありません。インドの場合、バープージー――一般大衆によるガンディーへの愛称で尊称―の良き理解者であり、継承者であるジャワーハルラール・ネルー（一八八九～一九六四）の一九三〇年代の著作『父が子に語る世界歴史』（英語版初版，一九三四～三五）の中では、2 ヵ所で無抵抗（non-resistance）なる用語が使われ、一箇所では否定すべき対象として、この用語が引用され、また別の箇所では無抵抗あるいは非暴力として、選択肢的な扱いが成されており、ネルーの認識には一種の戸惑いが見られます[6]。

饒平名はガンディーを無抵抗主義者として、また東洋の聖者として理解する日本の精神的風土で特有の通俗的な立場を拒否しています[7]。彼はガンディーの指導したサッティヤーグラハ運動に非暴力的非協同運動なる名称を使用します。その理念は以下の諸形態[8] で進められた。まず断食については不法不当な状況や条件への抗議意志を表明する初動形態であり、個人的な発意に依拠する個人行動と云えます。次にハルタール〔ハーター、ハタール〕があり、集団的な抗議意志の表明として、工場などでの労働者のストライキを意味する場合と、学校・公的機関・商店などの休業と閉鎖を含むもので、市民主体の集団行動が特徴的です。これは非協力運動とも呼ばれている抗議行動とも重なります。抵抗運動の最高形態としては不服従（civil disobedience）があります。これはイギリス側により不法に施行された諸法律の侵犯を公然と提唱する、反英・反帝国主義運動の大衆性を明示する最たるものです。対象を端的に理解する立場から、市民的なる形容詞（civil）の訳語の不必要性を提起したのは、第二次大戦後日本の

インド史研究の分野における先駆者の荒　松雄です[9]。

(2) **政党論**：―インド国民会議派〔国民議会〕は、英国の利益を目的として一八八五年第一回の大会〔議会〕が召集された。以来、多くの日月が逝いたけれど、会議派は何らの事蹟をも残すことはできなかった。またこの間にインドの政治史には多くの英雄児が続出したけれど、それはダーダーバーイー・ナオロージー、ゴーカレー〔ゴケール〕らの二三氏を除けば、ことごとく会議派以外の畑から生まれた。…彼らは第一、人民との接触地を有せなかった。彼らは…自己の名誉や、利益と伴う間はいささか愛国的だったけれども、愛国心のために死そのものをも尚辞せずという底の犠牲心は持ち合わせがなかった。また当会議派は一般に公開されたものではなく、特殊階級の人のみに参加をゆるされたものであったから、到底世論の府としての権威に勝ち得る可能性はなかった（184－185 頁）。

―この無能力すなわちインド国民運動の不振は時のインド総督〔太守〕カーゾン卿をして、インド人大いに与しやすしと見くびらしめ、暴政を行なわしめた。ここにおいて国民は、いよいよ会議派を通じて改革を望むことの矛盾せるに目覚めてきた（185 頁）。

―スワデーシー（国産品愛用）とスワラージ（自治）の提唱は、沈滞しきったるインド政治にとって新黎明であった。それは確かに無為無能の会議派を刷新する力を持っていた。一九〇六年カルカッタに召集したる会議派において、議長ダーダーバーイー氏は、英国宰相ヘンリー・キャンベル＝バナマン〔バンナーマン〕の言を引用して“如何なる良政府と云えども、自治政府には換えられない”と絶叫した。これは実に会議派に一新紀元を画するもので、それまでの会議派の目標は、ただ単なる「良政府」であった（186 頁）。

―ローラット法、パンジャーブ事件及びヒラーファット問題の三大問題は、インド国民を政治的に訓練するに与って力があったが、また会議派にも飛躍の機会を与えた。一九一九年一二月アムリットサルに開かれた大会は、この三大問題を掲げ、パンジャーブ事件の責任者ダイヤー将軍及びオドワイヤーの罷免、ローラット法の撤廃、総督チェルムスフォード卿の召還、対トルコ敵対行為に対する抗議、南ア特にトランスヴァールにおけるインド人移民排斥問題等を議長モーティーラール〔モチラル〕・ネルー―ガンディーに続く会議派指導者 J・ネルーの父親―の名で、インド担当大臣に電致して考量を求めた（187 頁）。

饒平名はインド政治史の起点にインド国民会議派の創立を置いています。これは政治史を政党発達史的な観点から考察する場合に全く妥当するものです。もちろんインド民衆史の立場からすれば、一九世紀半ばのインド大反乱こそ、その起点に置かれるべきことも確かです。この政党は政党ではなく、一部有志者のサロンであったから、インド国民会議とすべきだとの意見があります。それによるとベンガル分割反対運動をへて国民会議は政党として国民会議派に転化したと説明します。ここでは引用者はインド国民会議派と用語統一を計るべきで、たとえ参

加者がイギリスとの友好を掲げる名望家集団であろうと、政治目的の下に結成された組織である以上は、政党の範疇として理解しています。

ベンガル分割反対運動に関する饒平名の評価は当を得たものと云えます。帝国主義政策の分割支配政策が貫徹されているわけで、四大決議の意義付けも確かであり、反対運動のリーダーシップを見事に行使した、パールシー（ゾロアスター教徒、拝火教徒）系政治家、ダーダーバーイー・ナオロージーの役割確認は確かなものだと云えましょう。

一九一九年に開始されたガンディー指導の抵抗運動の経緯に関しては、当然のことながら、その展開過程と諸局面での新事態の説明は文字通りに具体的であり、その評価も説得的であります。この抵抗運動はインド地主制に向けられた反封建運動への一定の傾斜を持つ、納税拒否を基軸とする民衆の反帝国主義運動でありました。この運動はインド政治史を前後に区分する重大な分水嶺となります。当然、政治主体をインドの民衆側に置いた饒平名の視座には寸分の狂いもありません。

(3) 経済観：―ガンディーはその経済観においても独特である。ドイツにはドイツの経済が発達し、英国には英国の経済が発達した。インドは必ずしも英国の工業主義と自由貿易とを模倣する必要はない。英国とインドとはその地理的風土的条件において遥かに相違がある。故にインドにはインドの経済が起こらなければならないと云う。かくして彼がインドのための経済、真にインド的なる経済政策として立案し採用したのは、すなわち農業と手紡ぎの奨励であった。一方、外貨、つまり外国製品のボイコットにより、スワデーシー（国産綿布使用）を確立し、漸次に全ての物資の自給自足を計らんとする。その根本基調となるものは、村落生活を賛美し、工業主義の排斥と絶滅そのものに他ならない（126－127 頁）。

饒平名が指摘するように、ガンディーが目指したインド経済の方向は農業の発展にあり、とりわけ農村の手工業の象徴としてのチャルカー（手紡車）の家庭における採用を通じて、農民の生活自立を目指すとこにありました。見方によれば、一種のロマンティックな農村経済発展論の提起です。

しかし、インドの労働者や農民によるガンディー批判が、第一次世界大戦後に急速に盛り上がってきました。ここでは饒平名の所論を補完する立場から、インド大反乱後におけるインド資本主義の発達問題に一言して置くべきです。一九世紀半ば以降、インドでは商人・商業資本家による産業資本家への転化があり、主として西部インドのグジャラート地方において綿工業の発展がみられました。綿業資本家とその下での労働者群の誕生です。さらに二〇世紀初頭におけるスワデーシー運動の展開は、ターター資本による鉄鋼業の開設を促す結果となりました。こうして、インドにおいては労使関係は重大な政治・社会問題の一部を構成することになります。このような第一次大戦後の労働運動や農民運動の発展は、インドの政治史が新しい局面に

突入したことを意味しています。

（Ⅲ）イギリス留学時に、ガンディーは初めてインド古典の『バガヴァッド・ギーター』（神の歌、以下『ギーター』と略）〔バガヴアド・ギタ〕(10) に接します。ガンディーとの関連で、饒平名は『ギーター』に再三再四言及しています（2、15、21、68、83、93～95、121～122, 243 の各頁）。

―ガンディーによれば、『ギーター』は「大宗教的教義」であり、「善と悪との間で行なわれる、永遠の戦いを取扱かったもの」であり「ギーターの著書は、決して戦争や暴力を弁護しておらず、……それは非暴力の説教」である。そして「憤怒と激昂のない争闘のみが精神的である」ことを教えるものである…。

―その著作者は不明である…。内容は対話体の詩で、ヴィシュヌの権化たるクリシュナがアルジュナに向って、宗教と哲学との幽遠なる秘密を説いているが、全篇が崇高で、クリシュナは、大宇宙精神の象徴としている。それがサンスクリット詩としての最大の作物で且、義の実行哲学の典籍たるには、疑いがないようである（93～95 頁）。

ここで饒平名の問題提起を『ギーター』の説く所と対比すべきです。

（a）善人を救うため、また悪人を滅ぼすため、美徳を確立するために、私クリシュナは時代毎に姿を現わすものである（第四章第 5 頌、四―5）: 饒平名が理解した『ギーター』では、何よりもまず事物をめぐる“善と悪”との対抗関係の認識が重視されています。ここでは善なる人間への連帯と支援があり、それと対抗的で対照的な悪人の殲滅への激しい意欲が示されています。ここでは物事の処理上で、歳月の推移を超えて、善悪の黒白をつける必要性が提起されていると理解されます。

（b）生まれいずる者に死は必ずあり、死なんとする者に生は必ずあるから、手立ての無い事柄に嘆きを見せるのは妥当ではない（二―27）; さらに自分の義務を認識しても、君は怖れを抱くに値しない。なんとなれば、義務で結ばれた戦い以上に幸運をもたらす職務はクシャトリヤ以外には無い（二―31）: もともと人間社会の生と死の相互関係をかくも直截に論じた例を他に知らない。『ギーター』の作者は死との対抗のなかで生を論じており、生命肯定論に立った上で死を対象にしています。また戦争についても正義の戦いと邪悪な戦いの区別問題を提起しており、神話上の問題に止まらず、今日の戦争問題へ示唆するところ大です。

（c）君の職務は行為そのものにあり、その結果には断じてない、行為の結果を動機とすべきではない、また無為にこだわってはいけない（二―47）; 行為は知性の実践よりも遥かに劣るものである、知性に拠点を求めよ、結果を動機とするものは哀れである（二―49）:『ギーター』が“義の実行哲学”を説く場合、その“義”の根底には特定の利害関係ではなく、普遍的な条理に即して、人道や公共のために自己を投げ打つ、限りない自己犠牲が作動してい

ます。それは近現代インドのシャヒード（殉難者)思想に通底します。その実践者は、『ギーター』が説くところのブラフマー（Brahma)、つまり宇宙の最高存在である、“梵”に到達できるのだと理解されます。梵はいうまでもなく人間解放への道に連なります。

（d）饒平名による『ギーター』理解が、単に一方交通的に下降、または上昇する「神の歌」と云うよりは、クリシュナ神とアルジュナ神との“対話集”であると云う点の指摘も斬新で重要なものです。これは饒平名が事物の弁証法的な認識世界へ一歩踏み込んだ地点に立つ事態を端的に示すものです。何人も、対話つまりダイアローグ（dialogue）と、弁証法つまりダイアレクティク（dialectic）との間の相関性を否定できないからです。尚、注〔10〕で引用した対訳『ギーター』での対話を示す用語として、サンスクリット語でありヒンディー語のサンワード（sanwad：一八－74、76）が使用されています（pp.294、295)。

歴史的に見ますと、原典『バガヴァッド・ギーター』は紀元前二世紀頃に成立しました[11]。それは古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』（第六巻）に由来し、バラモン社会の間で、もっぱらサンスクリット語で愛唱されます。これは神話上の主役となる導師クリシュナ神と、従者アルジュナ神との間のハンディーな対話集です。以後、この叙事詩はバラモンの独占から離れ、仏陀の説教語のプラークリット語の抒情詩として口承され、やがて北インドのウルドゥー語（続けてヒンディー語）や、南インドのタミル語といった地域諸言語に媒介され、インド中・近世のイスラーム政権下に開花する、バクティ（人間への信愛）思想に継承されます。こうして『ギーター』は特定の刊行年を持たない、また特定の個人による創作でもない、幾重もの世紀にまたがり無数の人間の営為として、蓄積されてきた集団的な作品です。

『ギーター』は簡明なインド入門書、またはインド思想入門書であって、全体が一八章から成ります。内容面から見ますと、個から全体に及ぶ一連の矛盾・対立的な諸理念が二者択一を迫る形で配置されており、以下のカテゴリーに整理されます（括弧内は対応するヒンディー語です)。すなわち①徳と不徳（dharm & adharm：一－40)、②生と死（janm & mrityu：二－27)、③行為と結果（karm & phal：二－47)、④理論家と実践家（jnani & yogi：三－3)、⑤義務の履行と不履行（dharm & adharm：三－35)、⑥善人と悪人（sadhu purush & dushit karm：四－8)、⑦賢者と愚者（panditjan & murkhlog：五－4)、⑧友と敵（mitr & shatru：六－5，6)、⑨梵（ぼん)、つまり人間の創造神たる宇宙と万物（brahma & paramatma：八—3)、⑩動と不動（charachr jagat：一一－43)、⑪梵、女陰と精子（brahma, yoni & bij：一四－3、4）と⑫可滅と不滅（nashvan & abhinashi：一五－16）などです。

言い換えれば、アリストテレスやヘーゲルといった西欧世界の思想家たちのお世話に成らずとも、インドの民衆は紀元前の時代から『ギーター』の唱和行為への参加を通じて、自らはジナーナ・ヨーギー（理論の実践者）から、カルム・ヨーギー（行為の実践者）への価値観上の

転換と選択を求めてきた。彼らはその選択を媒介して、新しい矛盾関係のなかに学習以前とは異なる新しい自己を見出し、さらなる学習への道を探索する正・反・合の弁証法の壮大な営為を積み上げてきました。実はアメリカ人女性研究者のバーバラ・S・ミラー（一九四〇～九三、コロンビア大学）は、この『ギーター』に“規律ある行為の修行”と“苦行”と“梵”との間における、弁証法の存在を確認（一九八八年）しています―具体的に（五－1、2）を示すと推定されます―引用者[12]。他方で、彼女の指摘と同じ年、日本における『ギーター』研究の第二世代を代表する鎧　淳は、この書物が西欧世界における聖書『バイブル』と同様の位置にあると述べ、クリシュナ神とアルジュナ神との間の“哲学的な対話”であると明確に規定しています[13]。

（Ⅳ）饒平名はインド民衆による民主主義の選択と将来を関心の射程内に置きます。

―インドの村落生活の賛美は、その昔の制度パンチャーヤット〔「パンチャヤッツ」〕の復興である。パンチャーヤットは…五人の執行者による政治、経済と社会の統制でいわゆる村落コミューンの制度である。…インド将来の政治は、このパンチャーヤットとインド国民会議派の協同であらねばならない（250 頁）。

このパンチャーヤットに関しては、インド独立運動の先頭に立ったガンディーが自著『ヒンド・スワラージ』で、さらにはネルーが上述した『父が子に語る世界歴史』の中で、その存在意義を重ねて指摘しています。他方でインドの歴史家たちは概してこの問題に慎重な対応をしてきました。ネルーであれ、ガンディーであれ、政治家としてインドの光栄ある“伝統”に対処してきた事情があります。他方で古代史家 D・N・ジャーは古典『リグ・ヴェーダ』（前一二〇〇年頃）で三〇の氏族・部族の所在があり、主な五集団（パンチャジャナ、panchajanah）の存在を挙げ、続けてサバー（sabha）のような多少排他的な部族会議や、サミティ（samiti）のような部族会議の存在を指摘しています[14]。全体としてインド史の展開過程で、部分的で断続的ではあるにせよパンチャーヤットが一種の代表者会議の役割を持ち、一定の“民主的”な機能を果たしてきた点は認めて良いのではないかと私は思料しています。

一九四七年のインド独立後、会議派とネルー初代首相はインド憲法（一九五〇年）の国家指導原則の条項で、パンチャーヤット制度―インドの自治制度―の復活を提起しています。その後、アショーク・メーヘター委員会（一九七八）やサルカーリヤ委員会（一九八三）は、継続的にパンチャーヤット制度の導入と実施を歴代の政府に勧告してきました。こうした背景のもとで、一大転機となる、九二年の第七二次憲法改正では、インド全域を対象とする村、郡と県に及ぶ三層自治制度（the three-tier Panchayati Raj institutions）が導入されます。すでに一九七八年以来、西ベンガル州の左翼戦線州政府は、ジョティ・バス州首相の指揮のもとに同制度の導入を通じて、州内の貧・雇農層を主対象とする土地改革を進めました。この場合、農民組合が主導権を持っていましたが、パンチャーヤット制度下の民主的な役割が決定的な意義を

発揮した。広くバルガダール作戦と呼ばれた土地改革で、一三〇万エーカー（五二万六五〇〇ヘクタール）の土地が農民の間で分配されたと報告されています。

饒平名は限られた状況と条件の中で、独立インドの民衆が選択する民主主義の方向までを見通していた次第です。

（V）饒平名は一九四五年を熊本で迎えます。彼にとってジャーナリズムでの活動開始が第一期であるとすれば、続く一九三〇年代以降の調査・視察活動は第二期と重なります。こうして第三期の四五年以後は本土における政治・社会活動を主体とする時期を意味します。

沖縄への往還を断たれた彼は四五年七月、沖縄協会を発足させ、理事に就任（理事長は伊江朝助）し、翌年四月から政府（内務省・厚生省）から財政援助を得て、戦争引揚者の支援活動に従事、同一〇月には理事長に選ばれました。その任務は九州に疎開していた沖縄県民五万人の援護活動の提起にあり、政府（宮内省）への陳情活動により、三里塚の八〇町歩の土地に県民を入植させました。もう一つ、彼は四五年一一月に副会長として沖縄人連盟（会長：伊波普猷）を組織します。連盟は本土在住の民主的な全国組織であり、主要任務は沖縄県民の引揚者や復員者など一二万人の援護と送還にあり、一万人の遺骨の遺族への引渡しにあった。四七年、彼は一切の援護活動[15] から身を引き、執筆活動に集中することになります。

アジア・太平洋戦争による破壊の修羅場と化した沖縄について、饒平名はその著書『沖縄―現状と歴史―』（三一書房、一九五六年）で、中国古典では「国破れて山河あり」とあるが、沖縄では「国破れて山河なし、一草一木なし」と断じました（同上書、15 頁）。その上で四五年四月、沖縄に侵攻した米軍は同地を永久占領下に置き、特に五〇年六月の朝鮮戦争を機にして、米軍による民衆の土地強奪が進められ、五〇年代半ばには、その頂点に達した事態を伝えています（同上書、27～32 頁、96～114 頁）。以下は伊江島農民から日本国民に寄せられた嘆願書の全文です（同上書、104～105 頁）。

懐かしき母国の皆様！

われわれは、昨日も母国の皆様へ、嘆願書をさしあげまして御救いを求めましたが、又又御願い致さねばならぬ境遇に陥りました。それは五月九日午前八時半から米軍は、飛行機からの爆撃演習を始めました。われわれを実力行使によって強制立退きさせた米軍は、われわれの要請を無視して補償をしてくれぬので、地主たちは強引に柵内において農耕を続けていました。そこを監視兵が見つけて強制的に追い出され、黄金色に熟れた大豆も収穫できず、断腸の思いを致しております。

五月一四日の今日も、午前一〇時頃から只今午後七時までに、ヤー原（バル）の一〇万坪（柵外）、真謝原、茅毛原、親竹原等約一五万坪の耕地が焼かれ、今尚燃え続けていますので、農作物の被害は甚大な予想であります。

われわれの苦痛を、米軍の不作法を、一体何処に訴えるべきでありましょうか。沖縄では軍政府、琉球政府、立法院、土地連合会その他にわれわれの力と智恵の限りをつくして訴えましたが、何の効果も見出すことは出来ません。われわれに生きる為の補償も与えてくれません。戦争に負け武力を持たないわれわれ農民は、土地を取りあげられ生活の保障がなくされても黙っていなければならないのでありましょうか。

祖国の皆様！一体これは日本政府に訴えるべきでありましょうか。もし訴えるとしたら、如何なる方法を講ずれば、良のでありましょうか。もうわれわれには、少しの余裕もなくなりました。今のわれわれは、ただ祖国の皆様以外に、頼る道を知りません。どうぞわれわれに、ご協力とこの恐ろしい土地問題の解決策をお教え下さい。そしてわれわれも、日本再建のために共々に働かして頂くようお願い申し上げます。

右取敢えず、苦痛と悲しみのあまり、簡単に報告しお力添えをお願い致します。　敬白

昭和 30 年 5 月 14 日

母国の皆様へ　　沖縄県伊江島真謝区　大城幸蔵、同阿波根昌鴻と区民一同、伊江島西崎区　野原正重

さらに饒平名はアジア・アフリカ会議に先立つ、五五年一月、自由人権協会がインドはコルカタで開催のアジア法律家会議に日本代表（東大・潮見俊隆）を派遣して、沖縄問題を報告させた点に言及しました。その諸決議の第四部門では、沖縄問題が取り上げられ、「沖縄人民の市民的自由の侵害、日本の市民としての諸権利の強制的剥奪、保障のない土地接収及びその他のアメリカ占領当局の沖縄住民に対する不法な処罰」等、現地に赴いて検証し、国際民主主義法律家協会に報告を提出させる委員会任命を決議しているものです。この件に続いて、同年四月初め、ニュー・デリーのアジア諸国会議（沖縄祖国復帰協議会代表・神山政良）が、「満場一致で沖縄の日本への即時返還を決議した」旨も紹介しています（同上書、63～64 頁）。

終りに：饒平名の没後、一九七二年に沖縄の祖国復帰は成りますが、沖縄民衆の主体的で自律的な発展の道は日本国により閉ざされ、沖縄は今なお米軍基地の継続過程の渦中にあり、日本国による“憲法番外地”の地位を強制されています(16)。饒平名の後輩となる、東亜同文書院中退の芥川賞作家の大城立裕は、昨年来の日沖関係を「琉球処分、沖縄戦、そして今の基地問題は全部同じ。つながっているんです」と論じています(17)。

省みれば、同時代の大正・昭和の日本では、饒平名のインド論に耳を傾ける人も組織もなかった。わずかな例外を除いて、日本がアジア諸国に誇るべき近現代アジア論の欠落状況には惨憺たるものがあった。その例外中の例外として、最も良質な内容を創出し、当然、研究面から見ても先駆的な位置を築いた存在が饒平名でした。その生涯をかけて帝国主義批判、民族独立と民衆運動を堅固な理念系へ仕上げた饒平名は、二度にわたる琉球処分をまともに受け止め、沖

縄からインドへの熱い視線を放っていると同時に、インドを含めた近現代アジアの歩みの全体から沖縄を逆照射する役割を演じています。その暗夜の灯台は一条の光芒を私たちの行く手に照らし出しています。

主題に関連し、犬丸義一、岩崎健一、加藤哲郎、来間泰男、佐藤　宏、高松みどり、田中敏雄、内藤雅雄、日隅威徳、藤井　毅、鎧　淳の皆さんから様々なご好意に与りました。厚くお礼を申し述べます。また筆者は東京アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会杉並支部の総会（二〇一〇年九月三〇日）で、本稿と同一テーマで報告を行い、その場で若干の質疑応答があったことを付記しておきます。　〈2010・12・6〉

〔注〕

(1) 徳田球一「第一一回訊問調書」（一九三〇年一月三一日、東京地方裁判所）『現代史資料二〇・社会主義運動七』みすず書房、一九六八、八〇頁。尚、饒平名の政治行動、特に関東大震災直後の共産主義運動に関する個別研究として、加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書（下）」『大原社会問題研究所雑誌』492 号、1999・11；さらに戦中・「戦後」の同一課題を対象に、桜沢　誠「戦後初期の沖縄知識人における歴史認識の再構築について―永丘智太郎を例に―」『立命館史学』27 号、2006 と、森　宣雄『地（つち）のなかの革命―沖縄戦後史における存在の解放』現代企画室、2010 の両研究が挙げられます。

(2) 由井晶子「永丘智太郎」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、一九八三、六頁；犬丸義一「饒平名智太郎」『第一次共産党史の研究』青木書店、一九九三、四五四頁。

(3) 大川周明「印度国民運動の由来」（一九三一）『大川周明全集』第二巻、岩崎書店、一九六二年、508～530 頁。

(4) 幸徳秋水『帝国主義』（山泉 進校注）岩波文庫、二〇〇四〔一九〇一〕、一五七頁。

(5) M・K・ガーンディー『ガーンディー自叙伝』田中敏雄訳、東洋文庫、二〇〇〇、一六九頁では把持ではなく、固執としています。

(6) ネルー『父が子に語る世界歴史』（大山聡訳）、みすず書房、五巻、二〇〇三、二一三頁と同六巻、二〇〇三、三五頁〔Jawaharlal Nehru, *Glimpses of World History*, Vol. II, Kitabistan, Allahabad, 1935, p.951 & p.978)。

(7) 日本におけるガンディー研究の中で、石田雄（政治学）が、饒平名に関する簡略な解説（「日本人のガンディー像―生誕 100 年に際してその歴史的特徴を顧みる―」『みすず』一二九号、一九六九・八）を試みています。

(8) 中村「第一次非暴力的抵抗運動」（一九五八）『現代インド政治史研究』東京大学出版会、一九八一、一四頁。

(9) 荒『現代インドの社会と政治―その歴史的省察―』中公文庫、一九九二〔一九五八〕、一七

五～一八〇頁。

(10) インド古典『バガヴァッド・ギーター』に関して、鎧によればチャールズ・ウィルキンズによって一七八五年に初の英語版が刊行され、ウィルヘルム・フォン・フンボルトにより一八二五～二六年に初のドイツ訳が出されました（同著二四〇～二四一頁）。日本では辻直四郎『バガヴァッド・ギーター』（一九八〇年）の先駆的な研究があり、これに同一の訳著名で上村勝彦訳（岩波文庫、一九九二）と鎧　淳訳（中央公論社版一九九八、講談社版二〇〇八）が続く。

また本稿では、サンスクリット語とヒンディー語の対訳版の *Shrimadbhagavadgita*, Gitapress, Gorakhpur, Sanwat 1987, 296 pp.を利用しました。

(11) Jha, D. N., *Early India-A Concise History*, Manohar, New Delhi, 2004, pp. 143～145.

(12) Miller, Barbara Stoler, *Bhagavad Gita* in *Encyclopedia of Asian History*, Vol. I, Charles Scribner's Sons, New York, 1988, pp. 153 – 154.

(13)『バガヴァッド・ギーター』鎧訳・同解説、注（9)、二二八～二二九頁。

(14) Jha, *op. cit.*, p. 49.

(15) 饒平名・自筆略歴、七～八頁。

(16) 岡本　厚「普天間基地問題とは何か」『歴史評論』七二六号、二〇一〇・一〇、75～81頁。

(17)「過去から未来 引いた視点で」『東京新聞』夕刊、二〇一〇・九・二七。尚、合わせて大城『琉球処分』講談社文庫、二〇一〇〔一九七二〕参照。